

共同研究 ● 国籍とパスポートの人類学 (2007-2010)

越境とパスポート

「国際移民の時代」といわれるように、グローバル化に伴い、国境を越える人の流れが激しくなった。国連の推計によると、地球人口が69億人である2010年には、移民の人口は2億1400万人に迫っているとみられている。世界の人口の3.1パーセントつまり32人に1人は移民であるということになる。海外で生活する移民だけでなく、彼らから生まれる子どもたちなどに思いを馳せると、出身国と居住国との間の国籍法や制度の違いから国籍やアイデンティティの問題を抱えている人、越境にともなうパスポートとビザの問題に直面した経験を持つ人は相当数いることが推測できる。

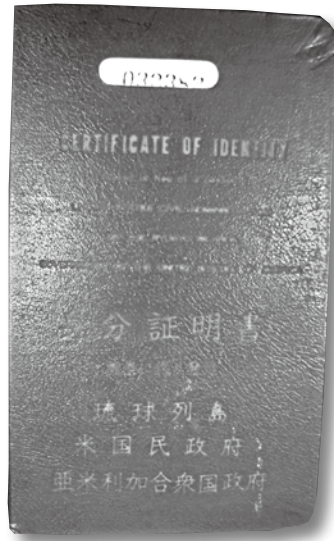
越境の問題は、グローバル化、ディアスポラ、移民などの研究領域で扱われてきた。その際、国籍は、アイデンティティの基盤として、あるいは市民権との関係で着目されてきた。しかしその際、パスポートそのものが研究対象とされることは少なかった。2008年、藤川隆男監訳による日本語訳が出版されたトニーの『パスポートの発明——監視・シティズンシップ・国家』（法政大学出版局）は、国民国家という思想の制度化を解明する1つの方法としてパスポートに着眼した点で、この研究領域への大きな貢献となったことは疑いない。

アイデンティティからアイデンティフィケーションへ

アイデンティティは「自己同一性」や「帰属意識」と訳され、「自分は何者か」ということの本質を追及するものである。ディアスポラや移民の研究はもとより、社会学や人類学の分野においてアイデンティティは注目を集めるテーマであった。むしろ、アイデンティティの重要性を否定するつもりはないが、アイデンティティは安定した核ではなく、他者との関係性において絶えずつくり出されるものである。われわれは、現実の生活において、実は、アイデンティティよりもアイデンティフィケーションがもつ効力がいかに重要であるかということを経験的に知っている。アイデンティティは自分自身の帰属意識を指すのに対し、他者が自分をどのように見なすのか、自分をどのように証明するのかというアイデンティフィケーションは、これまでの研究では見過ごされてきた。しかし、アイデンティフィケーションは現代社会で生きるためには欠くことができない重要なものである。しかも、実はアイデンティフィケーションによって、

個人の行動、権利が左右され、そして場合によってはアイデンティティの形成にも影響を及ぼす可能性を大いに有している。

ゆえに、われわれは越境、そしてグローバル時代の人のあり方を観察する際、射程をアイデンティティだけではなく、むしろアイデンティフィケーションに向ける必要がある。アイデンティフィケーションがいかなる効力を持ち、いかに機能しているのか、そしてアイデンティフィケーションによって人の行動がいかにコントロールされているのか、もしくは逆に、個人がいかにアイデンティフィケーションをコントロールし自己の目的を達成しているのかなどという考察を通してはじめて、国家と人々の関係を具体的につかむことができるだろう。



沖縄復帰前、琉球列島米国民政府が発給した旅券に代わる身分証明書（沖縄県立博物館・美術館所蔵）。

法、人、そしてモノをみつめる

これまで国籍の問題は、法律の分野で議論されることが多かった。しかし、国籍の付与、確認、変更、もしくは国籍証明など実際の運用は、人によってなされてきている。こうしたことに鑑み、国籍とパスポートをめぐる諸相、国民国家と人の相関関係とその実態を多角的に分析しようと、2007年より共同研究会「国籍とパスポートの人類学」が組織された。本共同研究会では、人類学、法学、

社会学、歴史学、政治経済学など各分野の研究者のみならず越境の現場に携わる入管職員などが、それぞれの視点、研究手法を通して国籍、パスポート、国境における入管手続きなどに着目してきた。特にこれまで対話の少なかった人類学と法学の間の議論や共同作業を通し、人類学ではあまり光が当てられてこなかった法的側面を分析することで、人々が有する多面的な帰属の実態と現実的な障壁などを明らかにした。また、フィールドワークとは比較的疎遠な法学者を交えてメンバーがともにフィールドに赴き、パスポートなど実物のモノを通して分析・比較研究を行った。こうした多角的なアプローチによる協働作業のみならず、博物館をもつ研究所である国立民族学博物館の共同研究会という特性を生かして、モノに着目したこと、そして、現場や当事者からの情報収集にこだわったことは、本研究会の独創的な点といえよう。

研究プロジェクトの内容

本研究会は以上のような研究関心から、2007年10月より2010年7月までの間に計14回、国籍やパスポート、身分証明書などに注目した研究会を実施したほか、さまざま

なパスポートを収集し、比較分析を行ってきた。

大きくわけて3つのアプローチ方法をとった。まずは、国家の側から見た国籍やパスポートの機能について注目し、領土の所有権が変動するなか現地の人々の身分証明書がいかに変化し、また、どのように使われているのかについて考察を行った。これに対し、2つ目のアプローチとして、個人の側から見たパスポートについて考察を行った。個人のライフストーリーに密着し、所持するパスポートや国籍によって生

活にどのような変化があったのか、アイデンティティにいかなる影響があるのかを分析した。ドキュメンタリー映画を制作したディレクターを特別講師として招き、映画を通して国籍やパスポートの問題について考える機会を持ったほか、共同研究会のメンバーがパネリストとして参加し2008年に開催した民博・UNHCR共催のシンポジウム「無国籍者からみた世界——現代社会における国籍の再検討」では、無国籍の当事者を招き、無国籍者から国籍・パスポートについて考える機会を持った。その成果は『忘れられた人々 日本の「無国籍」者』（明石書店 2010年）に纏められたほか、NGO活動「無国籍ネットワーク」の発足にも発展した。同団体は、無国籍の当事者のための相談窓口を設け関連団体と連携し支援を行うほか、当事者との交流会、無国籍の問題を広く社会に伝えるための勉強会やフォーラムなどを開いている。

3つ目のアプローチとして、本研究会は実物のパスポートや身分証明書を収集・閲覧し、比較分析することに重きをおいた。横浜開港資料館に所蔵されている開港当時（1850年代頃）の「内地旅行免状」という史料からは、日本に住んでいた外国人が日本国内を移動するために旅行免状、いわゆるパスポートが必要であったことが読み取れた。外交史料館、沖縄県立博物館・美術館、その他各資料館において、各種貴重なパスポートや身分証明書の閲覧を通し、モノが語る人と国家の関係の変遷、個人の認定方法の変遷、

つまりは、アイデンティフィケーションがもつ力学を考えることができた。パスポートはしばしば「国籍の証明書」と捉えられがちであるが、実は、その国に居住する外国人や無国籍者に発給されるものもあり、パスポートの種類と機能の多様性にも気づかされた。



ブラジルに移住した親族のパスポートを手にライフストーリーを語る講師の松原マリナ氏。



1850年代のパスポートを前に盛り上がるメンバーたち（横浜開港資料館にて）。

研究の展開と今後

3年間にわたる多分野のメンバーとの共同研究、そして実物のパスポートの分析を通し、各国の法システム、国による個人の身分と移動の把握は、システム化され複雑に絡みあっている一方で、ズレや落とし穴があることも浮き彫りとなった。複数国籍を有する者もいれば無国籍者もあり、各国人口（国民）の把握において国籍という制度自体の不備が指摘できる。また、パスポートのみならずビザがもつ力学も注目される。最終年度の今年はこの研究成果を、出版物にまとめるべく努力している。

また、本共同研究会の魅力は、研究会での議論がメンバー内のみにとどまらず、シンポジウムの開催や移民政策学会（これまで日本では語られることの少なかった移民政策について学術的な議論を行っている。本共同研究のメンバーの多くが、学会の発当初から積極的に関わっている）の立ち上げ、他研究会との連携、そしてNGO活動など実践の場での情報提供・支援活動にもつながっている点である。本館では、時代の趨勢にあわせ取り組むべきテーマの1つとして「包摂と自律の人間学」を大きな柱としている。国家を構成単位とする現代世界において、包摂と排除をめぐる制度を語る上で、国籍とそのアイデンティフィケーションの産物であるパスポートの問題を避けて通ることはできない。「みんなくワールドシネマ」も、本年度は国境と民族をテーマとしており、国籍やパスポートの問題がビビットに描かれている映画の上映や研究成果を踏まえた解説を通して、一般の方の本テーマへの関心も高まっている。年度末には「無国籍者の支援」をテーマにシンポジウムを計画しており、共同研究の成果公開と内外の研究者との連携を視野に入れつつ、この研究のステップアップをさらにはかっていきたいと考えている。

ちえん ていえんし

先端人類科学研究部准教授。移動・移住者と、国籍、国境、グローバル社会のダイナミズムを研究。著書に『無国籍』（新潮社 2005年）、『華人ディアスポラ』（明石書店 2001年）など。